

VI. 幼児期の発育発達の特徴

■ 幼児期とは（幼児期の一般的な発育や発達の傾向について）

幼児期とは、離乳がほぼ終了する1歳前後から就学前までの5～6歳頃の時期を指す。また、人格の基盤を形成する大切な時期でもあり、保護者や養育者（教員・保育士等、祖父母等関係する全ての大人）の果たす役割はとても大きいといえる。この時期の心身の成長には目を見張るものがあり、誕生時、身長約50cm、体重約3kgであるが、1年後には身長がその1.5倍、体重は3倍近くになる。5歳児になると男女で少し違いはあるが、平均でみると身長は108cm、体重は18kg程度になる。

発達心理学の分野では、この幼児期を2つに分けている。それは次の通りである。

- 1) 幼児期前期：1～3歳 2) 幼児期後期：3～6歳

幼児期前期（1～3歳）の終わりまでには自律的に排尿・排便が可能となり、更には衣服の着脱もできるようになる。3歳頃になると活発に動き回り、知的好奇心も旺盛になる。これらの発達課題をこなしながら、幼児期後期（3～6歳）を迎える。後期に入ると「自発性」が獲得され、未熟ではあっても走る・跳ぶ・投げる等の基礎的な運動が可能となり、ブランコの立ち乗りやスキップ等、より複雑でより効率的な動きを身に付ける。このような動作は脳髓の発達が深く関わっている。ヒトは他のほ乳類に比べ、この脳髓の発達が胎児から乳児、幼児にかけて顕著である。

脳の重さでみると4～5歳で大人の約90%に達する。なお、誕生時の脳の重さは約400g、大人（成人男女）では約1150～1450gである。

■ 幼児期の動作や運動の発達について

幼児期の動作発達の様子をみると、歩行は個人差があるものの、1歳3ヶ月頃までには歩けるようになる。また、この月齢の前後では、親指と人差し指の指先でモノをつまんだり、2つの積み木で塔を作る等の細かな動作もできるようになる。2～3歳頃になるとボールを蹴ったり投げたりすることやその場でジャンプしたり幅跳び運動もできるようになる。三輪車をこげるようになるのもこの頃である。3歳半から4歳半にかけては、片足跳びができるようになるのと同時に、数秒間片足で立つことも可能になる。同時期にはまた、つたないながらも人物画をかいたり、丸の模写ができるようになってくる。4歳半以降では、跳ね返ってきたボールをつかんだり、片足で立てる時間も長くなっていく。更に、少し複雑な人物画をかいたり、四角の模写もできるようになってくる。

■ 幼児期の心の発達について

心の発達についてみると、1歳半頃には10個ほどの単語が言えるようになり、後半になると、「ひとりでやりたい」という欲求が高まる。2歳を過ぎると行動範囲の拡大とともに、好奇心が広がり、強く自己主張を始める。また、何でも自分でやろうとする意欲が芽生えてくる。2～4歳頃に特徴的にみられるのが第一次反抗期である。突然「お母さん嫌い！」と言って1人でどこかへ行ってしまったかと思えば、「お母さ～ん」と甘えて戻ったりする。これを繰り返しながら徐々に自分の世界を広げてくる。これは自我が健全に発達するためのエネルギーでもある。反抗期を過ぎると幼児は心身ともに見違えるような成長を遂げていく。保護者や養育者からの脱皮を図るスタートラインに立ったようなもので、欧米ではこれを「独立期」と呼んでいる。うそを言い始めるのは3歳頃からで、相手にわざと反対のことを言ったりする。

ところで、新生児の段階から周りの人をまねる行動はできるが、4歳になると単なる模倣から学習へと大きな変貌を遂げてくる。つまり、周囲を見る力（観察力）が付き、行動パターンも増え、予測しながら自分なりに改良を加えていく能力が身についてくる。5歳になると自分中心の世界から他者との関係を理解し始める。つまり、思いやりの心が芽生え、共感できるようになる。したがって、気の進まない役割でも集団の中で受け入れることができるようになる。また、結果から原因を推測する等、論理的思考力も発達し始める。

より健全な幼児期の心身の発達は集団生活の中で培われてくる。特に「遊び」は幼児相互の繋がりを育てる意味でとても大切である。この遊びも3歳頃までは「並行遊び」と呼ばれ、めいめいで遊びながら、道具を共有しようとしめない遊び方が中心である。4歳頃になると「協調遊び」に発展し、次第に周囲にも関心が向けられ、道具の貸し借りをしたりして一緒に遊ぶようになる。5～6歳では「集団遊び」が可能なり、少人数のグループで、ルールに則った遊びとなってくる。リーダーシップを取れる幼児も増え、グループ内の役割を認識して行動できるようになる。

以上が、幼児期の心身の発育発達の特徴である。この時期は、個人差や個人内の発達にも大きな違いがある。したがって、成長を焦らずに見守りながら育てていくことが大切である。

■ 今回の調査結果からみた全般的傾向について

幼児期の心身の発育や発達の一般的な特徴は、上述の通りであるが、自立歩行が可能になり行動範囲も拡大していくとそれぞれに個性も現れてくるようである。

幼児の運動能力調査では6種目の測定結果を得点化しその合計得点で、5段階（A～E）の体力総合評価を行っている。実践園での取組から次のことが明らかとなった。ここでは分かりやすくするために、ABC評価をABC群、DE評価をDE群とし、その特徴についてまとめた。おもな結果は（図表5-1-1）以下の通りであった。

- 1) 「園で体を活発に動かす遊びを非常によくする」幼児はABC群の比率が高かった（非常によくする：86.9%、少ししかしない・まったくしない：55.1%）。
- 2) 更に詳細に、「園で体を活発に動かす遊びを非常によくする」幼児に着目すると、「戸外での遊びが多い」かつ「家庭で体を活発に動かす遊びを非常によくする・よくする」幼児はABC群の比率が高かった。
- 3) 次に、「園で体を活発に動かす遊びをよくする」幼児に着目すると、「家庭で体を活発に動かす遊びを非常によくする」かつ「一緒に遊ぶ友達（4人以上）の人数が多い」幼児はABC群の比率が高かった。
- 4) 視点を「園で体を活発に動かす遊びを少ししかしない・まったくしない」幼児に移すと、「家庭で体を活発に動かす遊びを少ししかしない・まったくしない」幼児が最もABC群の比率が低く、44.4%であった。

■ 3年間にわたる実践園での取組からみた成果について

次にこの事業で実践園が取り組んできた成果の一部を質問紙調査結果の年次推移からみしてみる。

「(園での) 自由な遊びのとき、活発に体を動かす遊びをどれくらいしていますか」という問いに対し、「非常によくする」と回答した比率は実践園全体で1年目20.9%、3年目は33.5%。これに対し協力園では、1年目24.1%、3年目23.8%となっていた。その年次推移は図表5-4-1に示した通りである。

次は「(家庭での) 遊びは室内での遊びと戸外での遊びとどちらが多いですか」という問いに対し「戸外での遊びの方が少し多い」または「戸外での遊びが非常に多い」と回答した比率を合計すると実践園全体で1年目18.2%、3年目は23.2%。これに対し協力園では、1年目21.0%、3年目25.6%となっていた。その年次推移は図表5-4-2に示した通りである。

次の質問は幼児の様子を観察しながら回答してもらう項目で、「(園での) 自由に体を動かす遊びをしているとき、楽しそうですか」と尋ねたところ「非常に楽しそうだった」と回答した比率は実践園全体で1年目26.8%、3年目は38.0%。これに対し協力園では、1年目32.9%、3年目29.0%となっていた。その年次推移は図表5-4-3に示した通りである。

同じく観察評価の内容で「(園での) 自由な遊びのとき、よく一緒に遊んでいた友達は何人くらいですか」と聞いたものである。これに対し「4人以上」と回答した比率は実践園全体で1年目42.9%、3年目は47.4%。これに対し協力園では、1年目40.8%、3年目34.8%となっていた。その年次推移は図表5-4-4に示した通りである。

以上の推移から、3年間の取組を通して、実践園の幼児はより活発に動くようになったことがわかった。これは当該園の教員・保育士等がこの事業の目的や趣旨を理解し、積極的な関わりを持った結果である。幼児の発育や発達には個人差があり、心身発達のスピードも異なる。しかし、場と時間を設定し、少しのきっかけを与えれば、幼児の持つ多様な能力を十分に引き出すことができることがこの事業を通して明らかになった。

※参考文献は180ページ参照